

草庵仏教

第205号
(発行日)

2007年7月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会——毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

平生が大事

近年、末期ガンなどで治る見込みがなくなつた人たちが治療よりもケアを中心にした医療施設で終末を迎えるという、そういう施設が日本にもいくつかできてきた。そこは、患者に苦痛を強いる治療行為よりも肉体的な苦痛を緩和するのを中心にし、患者の精神的な不安を除いて、人間生活の質を低めないような生活ができるように配慮した病棟だといわれている。

こうした終末期の日々を送っている人たちの身心、ことに精神的な不安とか苦悩を緩和するための活動をホスピス活動とかビハーラ活動といわれている。

終末期における患者さんは「なぜ私はこんな病気にかかったのだらうか」「何も悪いことをしていないのに何で私がこんな病気にかからねばならないのか」というような怒りとか、「あの時ああすればよかった」「今となつてはや

りなおしができない」というような後悔だとか、「今までの人生はなんだったんだらうか」という人生の意味が分からなくなり、人生そのものに空しさを感じるとか、「死ぬときはどうなるのだらうか」とか「死んだらどうなるのだらうか」といった死および死後にたいする不安、それに「私は結局ひとりぼっちなんだ」という孤独感というような、そういう不安や苦悩を抱えるものだといわれている。

しかし、こういう不安や苦悩として現れるこのようなさまざまな問題は、死を間近にした人たちだけではなくて、元気に日常生活を送り、それなりに楽しんでいる人たちもかかえている問題でもある。誰もが心の奥に持っている問題であろう。

ただ、そのことを自覚し、自分ののつびきならぬ問題にしているか、それともしないままで日々を送っているかの違いがある。

こういう問題を抱えていながら、忙しい日々を流され、いつの間にか歳をとり、気がついたらガンになっていて、もう治らない。このような生命の限界にぶつかった時、こころの表面に浮上してくるとい

う場合が多い。しかし、終末期にこの問題を解決するにはあまりにも時間が少ないのが現実である。

そんな中でも、カウンセラーとか宗教関係者とかがよりそつて、こうした患者さんの心の不安や苦しみに共感しつつ援助をしていくというホスピス活動とかビハーラ活動はたしかに大事なことだと思

う。ただ、生きていく意味とか人生への悔恨とか孤独とか空しさとか死と死後の不安というような問題は、元気で生きている人にすでにある問題であるから、それを終末期に至

るまでに、問題に対する「開け」「光」「道」が与えられるべく、元気なときに心を寄せ、取り組んでおくことがやはり大事だと思う。

終末期に至る前であれば、それについて学ぶ時間は十分にあると思う。

平生の時に、大事な問題は後回しにせず、聖賢に学び、人生に光を見出ししておくべきであろう。

大無量寿経には「世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」という仏語があるが、世間の人

人は、軽薄であつて、急がなくてもいいことを、先を争っている、と。裏から言えば本当に急がなくてはならないことを後回しにして日送りをしている

と積尊は仰せられている。平常時にこそ、こうした大事な問題に心を寄せておきたいものである。(了)

《孟蘭盆会法要》

八月十日(金)

午後二時始まり

真宗問答(三六)

第二十二願その二

(第二十二願)

たとい我、仏をえんに、他方の仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して、究竟してかならず一生補処にいたらん。

その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧をきて、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国にあそんで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをばのぞかん。

常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずんば、正覺をとらじ。

(現代語訳)

わたしが仏になったとき、他の仏がたの国の菩薩たちがわたしの国に生まれてくれれば、必ず菩薩の最上の位である一生補処の位に至らせよう。それぞれの希望によって自由自在に人々を導くため、

D 「そうですね。仏のさとりを完成したら、迷える衆生を仏道に入らしめんがために、あえて一生補処の菩薩の位になって、迷いの境

界に還ってきて衆生救済の大悲の菩薩行を行わしめようとの願である、と宗祖聖人は了解されたのです」

*

K 「ではなぜ、法蔵菩薩はこのような願を建てられたのでしょうか」

D 「このことを阿弥陀仏に救われる私たちの側に立って考えてみると、二十二願を起された如来法蔵様の深いお心の一端が分かるように思います。私たちの一番根本的な願いは自分が助かりたいという願いであることはいまでもありません。しかし、助かりたいという願いの中に、他を助けたいという願いがあると

思えます」

K 「自分が救われたいという心、その心の中には他を救いたいという願いがこもっているのですね」

D 「そう思います。それは人がもっている宗教心だと思います。たとえば家族の中で、自分は幸せであると思っ

ても、子供や孫が苦しんでいると、それを何とかしてやりたい、悩みを解決してやりたいと思ひ、周りの人の苦しみが自分の問題になり悩みにもなる。業縁で結ばれている私たちは、単に自分だけが救われたいとは思わない、皆ともに助かりたいというのが私たちの心の奥にあります」

K 「我も人もともに眞実にあり、本当の幸せを得たいというのが心の底にありますね」

D 「そういう心を宗教心というなら、この宗教心はもはや自我心から出たものではなくて、いのちそのものがもっている願いとっていいかもしれません」

K 「それは単なる自我心、煩惱の心ではなくて、いのちそのものがもっているような願いの心ですね」

D 「そう思います。私のいのちは自我に収まるものではなく、いのちは自我の私を越えていると思います。そういういのちそのものがもっている願いが宗教心でありましよう」

K 「そうすると宗教心は自我の私から出てくるのではなくて、私を越えていながら私のいのちになっっているような、

そういういのちから出てくるのですね」

D 「そう了解しています。自我を越えて、自我もそのなかで起こるようないのちがあり、私自身もそういういのちの中にあるといえましよう。そして、そのいのちは阿弥陀のいのちと連なっているといえましよう」

K 「私の自我を越えて、私もそのなかにあるようないのち、それは阿弥陀のいのちと連なっているいのちなのですね」

D 「ええ、そう聞かせていただいています。私とはなれず、私を包んでいるような阿弥陀のいのちですから、宗教心が私に起こるのは阿弥陀仏の願心に促されて、起こるといえるのではないでしようか」

K 「阿弥陀仏の願心が私に促してきて、私の宗教心として働くのですね」

D 「その宗教心は、私において起こり、(救われたい)という深く強い願いとなり、また同時に(他を救いたい)という願いでもありましよう。これが人に起こってくる根源的な願いでありましよう。この願いが満足されない限り人は十全に救われるとい

うことはいえないと思いま
す」

K 「私だけが救われたらいい
という救いでは心の底にある
願いは満足しないのですね」

D 「ええそうです。自分は阿
弥陀様にであいい、救われたと
喜んで、たとえ、周りに
いる親しい家族が阿弥陀様と
であわす、生と死に道がつい
ていない。そういう人たちは
どうなるのであろうか。どう
すれば助かるのであろうか、
というのには必ず問題になりま
す。他者の苦がそのまま自分
の問題です。自分の問題の中
に他者の救いだけの問題がありま
す。自分の救いだけを求めて
いる間はそのことに余り気づ
きませんが、やがて自分の救
いだけでは完結しないことに
気がつくのです」

K 「他者はいかに救われるか、
どうしたら救われるか。これ
は大問題ですが、それは救わ
れた人が救われていない人に
仏法を説き、導いていけば救
われるのではないですか」
D 「ええ、論理はそうなん
ですが、現実には他者に仏法を説
いたからといって、容易に他
者が仏法を信じて救われると
いう風にはなりません。伝道
行為によって周りの人が救わ

れていくことは決して簡単な
ことではありません。それど
ころか、いつも人間の努力の
限界にぶつかります。〈力及
ばず〉〈私の力ではどうする
こともできない〉という壁に
ぶつかります」

K 「この世で、自分一人さえ
救われるのは容易ではないの
に、他者を自らの力で救うと
いうのは非常に難しいことな
のですね」

D 「ええ、人間はお互い反真
理的な存在です。真実に背を
向けて、自らの想念にたぶら
かされて、大きな夢の中にい
るような存在ですから。曇鸞
大師は

**長く大夢に寝ねて出でんと悒
ふを知ることなし**

と仰せくださっています。凡
夫は、昼間から寝入って大き
な夢を見ている。しかも夢と
も知らないから、それを離れ
ようと願わない、と言って
おられます」

D 「夢を見て、その夢を現実
と思ひこみ、本当の現実を逆
に幻想のように思ひ、真実
を知ろうというような願ひさ
え起こさず、まどろんだまま
であるといわれるのですね」
K 「阿弥陀様にふれて、やっ
と夢から少し覚めはじめるの

です。しかし、そうだったか
らといって、さあそれじゃあ
他の人々を導いて救おうと働
き出しても、なかなか人は真
実を聞こうとも、真実に目覚
めようともしないのが現実で
す。そこに大きな悲しみや嘆
きがあるのです。そしてこの
問題をすでに知りたもうて道
をつけてくださったのが第二
十二願なのだと思います」

K 「人を救うことはできない
という壁にぶつかってしまった
私たちに、阿弥陀様は二十二
願でどう仰せられるのです
か」

D 「浄土に生まれ仏の徳を成
就したものは他の衆生を救い
たいという願ひにそつて、さ
まざまな境界に還つて、生き
とし生けるものをさわりなく
救うていく普賢菩薩の様な活
動をなさしめたい、との阿弥
陀仏のお心です」

K 「なるほど、現世では他の
人を救うような働きが難し
い。そんな者も浄土に生まれ
たなら必ず他のあらゆる衆生
を導き助けていくそういう広
大な働きを為さしめよう、と
の願ひですね。有難いですね」
D 「そして、他の衆生という
とまずは身近な者をというこ
とで、『歎異抄』には

**ただ自力をすてて、いそぎ浄
土のさとりをひらきなば、六
道四生のあいだ、いづれの
業苦しめりとも、神通方
便をもつて、まず有縁を度す
べきなり**

（自力にとらわれた心を捨て、
速やかに浄土に往生してさと
りを開いたなら、迷いの世界
にさまざまな生を受け、どの
ような苦しみの中にあろうと
も、自由自在で不可思議なは
たらきにより、何よりもまず
縁のある人々を救うことがで
きるのです）

と記されています」
K 「まずは身近な縁のある人
たちを救いたいというのが、
私たちの願望ですからね」
D 「さて、この二十二願は誰
に向かつて説いてくださるの
かという、まずは迷えるこ
の私どもに説いてくださるの
でありましょう。今この娑婆
にいる私たちに第二十二願を
聞かせてくださるのです」

K 「なぜ、救いの何たるかも
知らない私たちにこのように
聞かせて下さるのですか」
D 「それは南無阿弥陀仏を私
たちに信受せしめたいからだ
とうかがえます。一人一人に
与えてくださる南無阿弥陀仏
のお徳が、衆生を救うのみな

らず、救われた私たちを他を
救うものたらしめようという
広大な大悲の徳があるという
ことを聞かせてくださるので
す」

K 「利他する徳まで込めて与
えてくださる南無阿弥陀仏と
いうことを聞かせていただく
のですね」

D 「ええそうなのです。南無
阿弥陀仏にはこのような広大
な大悲の徳がこもっているこ
とを聞かせていただく。その
ような広大な大悲を聞くこと
ろに大悲が信受され、南無阿
弥陀仏が私に信心として届い
てくださるのです」

K 「自他ともに救われる南無
阿弥陀仏だから、どうかこれ
を受け取ってくれよとの阿弥
陀仏の思し召しなのです」
D 「そういただいています。
聖人は

**南無阿弥陀仏の回向の
恩徳広大不思議にて**

**往相回向の利益には
還相回向に回入せり**

（南無阿弥陀仏の、我ら人間
をすくいたもう回向のはたら
きその恩徳の広大な不思議
によって、往相回向の利益と
して、方向を回転してはから
ずも還相回向に回入する）
と和讃されています」（了）

信心夜話

(一蓮院師の) 仰せに、助けてやろうとの言葉だけでは、事たらぬように思うであろうが、これは誓願の不思議と云うものじゃ。

外の人が尋ねたら、如来様が助けてやろうとあるので、助けて下されると戴きましたと申せ。(「一蓮院談合録」より)

口に出てくださるお念仏は、そのままが阿弥陀様の現れであり、阿弥陀様の仰せである。それはどんな仰せかという「助ける」「助ける」の仰せ、「引き受ける」の仰せである。これを聞くと、そんな短い話ではたよりない、ものたりない、もっといろいろ聞かせて欲しい、納得できるように詳しく話して欲しいと思うのが私たちである。

しかし、いろいろたくさん聞いても、詳しく聞いても、結論は「汝を助ける」の一語に収まる。この一語ばかりで不足はないのである。何時聞いてもこの一語で足るのである。この一語に私たちを導き入れようとして浄土の三部経の説法があり、法話やお説教があり、たくさんのお聖教の説明がある。妙好人の庄松同行の話に、

「勝覚寺の先代住職は、庄松同行を非常に愛撫せられ居りしが、役僧の一人がそれをうらやましく思い、一つ庄松を困らせて恥しめんとて、三部経の中の下巻を取り出し、庄松に向かい。お前は有難い同行さんじゃが、この

大無量寿経の下巻の、此処の御文を読んでみよといえ。庄松の答に「庄松を助けるぞよ助けるぞよと書いてある」といわれたと。

〔庄松ありのまま記〕

とある。住職からかわいがられている庄松同行をひとつ困らしてやろうと考えた勝覚寺の役僧さんが、文字も読めない庄松同行に、難しい大無量寿経の下巻を取り出して、庄松に見せ、「ここを読んでみよ」と差し出したとき、庄松同行が言うに「庄松を助けるぞよ」と書いてある」と即答したという。

浄土の経典の言わんとするところは、何か。それは阿弥陀様が「汝を助ける」という一言に極まり、それが経典の要であり、南無阿弥陀仏のいわれである。

こう聞いても、そんな簡単なことではないのか、訳をきかせてくれといいたくなるが、今この私に仰せ下さる、弥陀の「助ける」の仰せは、不思議の中の不思議であって、こんな凡夫の頭に「助かる」訳が知れるものではない。阿弥陀様の方に広大な大悲があつて、どうしてみようもないこの私のすがたを、すでに知っておつてくださって、「汝をまるまる引き受ける」と仰せ下さるのである。

それはあまりに簡単すぎ、単純すぎて、受け取れませんというても、そういう私がそれじゃあ、どこで助かるのか。助かるような身にいつなれるのか。どうしてみようもないではないか。

この、どうしてみようもない私は、このありのままを助けていただくほか道がないではないか。それでは不足であるというのは、我が身知らずというほかない。

今夜も知れぬいのちとなれば、もう手ぶらのこのままを「助ける」の大悲一つがたよりではないか。もうちつとなんとかなるだろうと、未来に救いを考えているのは、これからもつと聞いて何とかなつてと、まだ自分がいつかどうかなつて、納得して、有難うなつて、いつかは今の私ではない信者らしい、仏法者らしいものになつてと、思っているからである。それは自分を買いかぶっているだけである。

十年たつても今の私と変わらぬ私が残るだけである。まるまる助かる縁がない私が残るだけである。

そんな私に、「助かる縁なき者よ」と、阿弥陀様は私が知る前から、私の自性を知り抜いていてくださって、今「そんなお前だから助ける」と仰せ下さっているのである。(了)

《住職雑感》

牛肉ミンチに豚肉を混入し、賞味期限を改ざんするなどの不正行為を長年続けたミートホープ社が発覚し、社長が謝罪するというニュースがしばしば流れてくる。テレビを見る限りでは、社長の謝罪といつても世間向けの表明であつて、心からの懺悔は感じられなかった。自分の罪を実感するのは本当に難しいものである。それと気になるのは社員の多くは不正を知つていても、それを告発した社員は殆どいなかった。上からの命令なら、悪いことだと知つていてもやらざるを得ない、やつてしまうというところに、凡夫の弱さがあるのであろう。内部告発すると自分たちの生活が危機に陥るといふ恐れをもつてい

るからであらう。不正を命令するのも罪だが、それを悪と知つて行うのも罪である。こう思う私が社員だとすると、家族の生活のために悪に目をつむつて、社長のいうままになる可

【八月行事予定】

*八月二日(木)
午後三時・念仏会
午後七時・共学会

*八月十日

午後二時・念佛寺孟蘭盆会
(八月十六日の共学会、八月二十二日の同朋の会はありません)

【九月行事予定】

*九月十二日
午後三時・念仏会

*九月二十日(木)
午後七時・共学会

*九月二十一日
午後二時・念佛寺秋季彼岸会

なお九月は北海道出講のため、左記の日の集会を休会いたします。

*九月二日・念仏会
*九月六日(木)・共学会

能性も十分感じる。それほど生計の破綻を恐れ、食えなくなるのを恐れるという煩惱は強い。保身のために悪を見て見ないふりをしてしまう。凡夫は弱いものであり、弱さは罪である。

(了)